
幸せの歌声

美羽

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せの歌声

【Nコード】

N9646P

【作者名】

美羽

【あらすじ】

舞台は双葉学園。ここに通う和島健は、虐めを受けていた。健は弱気な少年だが、はたして変わっていただけるのか・・・？

登場人物紹介

和島 健^{わじまつよし}：中学2年の男の子。気が弱く、いじめられやすい。

現在、いじめられている。

星野 響歌^{ほしのきょうか}：年齢不明。歌を歌うのが好きで、歌声がきれい。友達はいない。

松本 祐樹^{まつもとゆうき}：健をいじめているメンバーのリーダー。

お父さんはお金持ちの偉い社長なので、だれも逆らえない。（中学3年）

学校の生徒：健のことをいじめている。いじめるのが好きな人もいるし、いやいや従っている人

もいる。

宮崎 真守^{みやざきまもる}：健の親友だった。しかし、健がいじめられてからさっけなくなり、いじめのメンバー

に・・・（中学2年）

神陰 浩介^{かみかげこうすけ}：いじめが大嫌いで、いじめている人をよく助けている。

普通の時は少し冷たい。（中学2年）

森谷 自由^{もりやみゆ}：浩介の友達。浩介の事が好きで片思いの女の子。（違う中学校の2年）

小川 大輔^{おがわだいすけ}：浩介の親友。困った時はいつでも助けてくれる。（違う中学校の2年）

登場人物紹介（後書き）

新人作家の美羽です。

間違っていたら教えてください。

感想待っています。

「アイツに言われたとおりだ」

——もう嫌だ……。この世界も、この中学校も……。——

“何もかもが嫌だ”と思っている、中学2年の和島 健は学校から遠く離れた森にいた。

木に寄りかかりながら、健はつぶやいた。

「何で僕がいじめられなきゃいけないんだ……」

キーコンカーンコン……

つぶやいたと同時に、授業の始まりのチャイムが鳴った。

「学校さぼっちゃおう……。どうせ行っただって嫌な事しかないし……。双葉学園の人たちは、みんな敵。だったら僕一人でいた方がマシだ。明日からさぼろう……」

健は自分が通っていた中学校の事を、思い出しながらぼそりと言った。

ガサツ！……。サク、サク、サク……

——誰かがいる。誰かがこっちに向かって、歩いてくる！

しげみに隠れながら、その“誰か”が“アイツら”だったら……。という不安と恐怖で健の身体は恐怖でカチンコチンになっていた。しかし、“誰か”は健の存在には気づいていない。

「よしっ、ここでいいや！私以外、人もいないみたいだし！」

“誰か”は明るく元気に言った。健は“誰か”が一人という事、“声”からして、女の子だという事に気がついた。

——とにかく、集団じゃなくてよかった……。でも見つかったら、いじめられるかもしれない……。

と、弱気になっていたら、突然歌が聴こえてきた。

とてもきれいな歌声が。

健はその歌に、聴きいつていた。不安も恐怖も全部忘れて。それほど、その歌声がきれいなのである。言葉にできないくらい。

——ハッ！ 健は目が覚めた。歌に聴きいつていたら、いつの間にか眠ってしまったていたらしい。

——僕は寝ていたのか……。本当にあの歌声はきれいだったな……。そういえば、あの女の子は？

あたりを見回したが、誰もいなかった。

——……。いないか。もう夕方だから、帰ろう。

真つ赤な夕焼けの中をとぼとぼと歩いていると、後ろから声をかけられた。

「あつれ〜？ 今日学校を休んだ健くんじゃーん！ 前さー俺“毎日学校に來い”って言わなかったっけー？ 聞いてなかったのー？」

その声は軽い口調で健をからかうように笑いながら言った。健はおびえていた。なぜならあの声はアイツだからだ。アイツは健をいじめているリーダー的存在、松本祐樹だ。祐樹がどんな健に近づいていく。背中がゾクゾクとする。逃げようと思ったが、足が動かない。

——あ……。足が動かない……。！！ 何で……。何で……。！！

気づけば健の真横に祐樹がいた。祐樹は先刻の笑った顔とは違い、今の顔はとても真剣な顔をしていた。健が顔をうかがっていると、祐樹の手が健の顔にあたった。

ボコッ！！

にぶい音がして、健は祐樹の足元に倒れ込んでいった。

「っ……。……。！？」

健は祐樹の事を思わず睨み付けてしまった。慌てて視線をそらした健。その顔は今にも泣きそうだった。健の表情を見て祐樹は、

「お前、ちよつとは成長してるな。この俺様を睨み付けるとは。

しかし、お前のある点は直っていないなあ？

世界一泣き虫で弱つちいという欠点がよお——！」

と、誉めているのか、貶しているのか分からない言葉を、健に投げかけた。健はその言葉に対して、何か返そうと思ったが言葉に詰ま

つてなかなか言い返せない。

「あ・・・あの、ぼつ僕は・・・その・・・えつと・・・」

初めは笑って聞いていた祐樹だが、だんだん健の喋り方に苛々していき、大きなため息をついた。

「お前さあー！その喋り方、苛々するからやめろっ！！・・・あゝもうむしゃくしゃする！

そうだ、いいこと考えたゝ！ストレス発散にお前を・・・」

と言った瞬間、祐樹が倒れこんでいる健に腹や顔、足などを思いつきり蹴り始めた。それも健を見下した目で笑いながら。

「フ・・・フハハハハ！こりゃゝいいストレス発散法だ！」

ドゴッ！ボコッッ！！

「うゝぐ・・・！っ・・・かはっ！ぐ・・・うゝう・・・！！」

健はうめき声をあげ、口から血をはき、顔は青あざだらけになっていた。だんだん視界も悪くなつて意識も朦朧もつろうとしている中、健は青く澄んで空のような爽やかな声を聞いた。

「祐樹様、もう夜遅いのでお戯れはよしませんか？」

その声を聞いた祐樹はピタリと止まった。

「・・・神陰。——もう夜か。ちよつと健君と遊びすぎちゃったなあ？

じゃあ、そろそろ帰るとするかな！！」

神陰と呼ばれた青年は、健と中学校が一緒に、噂ではいじめられている人を助けているらしい。その噂で学校では、ちよつと有名だった。と、いうことしか健はその青年の事を知らなかった。

「じゃあな！泣き虫君！また遊ぼうなゝ」

祐樹はそう言つと、神陰と共にさつさと帰ってしまった。一人だけポツンと残された健は、立ち上がることにすら出来ず、その場にただいることしか出来なかった。祐樹に殴られたせいか、頭がズキズキと痛む。

——さっきアイツにやられた所が、痛い・・・

健は地面に倒れ込んだまま、身動きも出来ずそんなことを考えていた。

——うっ！！ 頭が・・・っ！

突然、頭に激痛が走った。さっきよりも何十倍もの痛さが、健の頭を襲う。

——もう何が何だか分からない・・・意識が・・・！

とその時、一人の青年が健の所に走り寄ってくる。普通ならば青年が誰だか分かるはずだが、今の健は視界が悪く、意識も朦朧としていたため、その青年が誰なのか分からなかった。

丁度青年が健の近くに來た時に、健は意識を失った・・・

「俺は、決心したんだ」

健は夢を見た。それは恐ろしい悪夢だった。

始めは健の周りに、沢山の友達と親友がいた。一見、楽しい夢じゃないかと思われるが、それは大きな間違いだった。沢山いた友達が一人、二人、三人・・・と、居なくなってしまったのだ。とうとう残ったのは、親友だけになってしまった。だが、その親友も居なくなってしまった。

“ お前なんか、親友でも何で

もねえーよ”

と言っ言葉を残して。そこで夢は終わる。

健は飛び起きた。寝巻きは、汗でびっちょり濡れていて気持ち悪い。喉もカラカラだ。

——嫌な夢を見た・・・ここは、どこだろう・・・？ 僕は何をしていたんだろう・・・

健の頭の中には、疑問しか浮かばなかった。あたりは白一色に染め上げられていて、健はふと、どこか歩きまわってみようと思い、立ち上がるうとしたが・・・

——っ・・・！頭が、痛い・・・！！

頭に激痛が走り、勢いよく床に倒れ込んだ。その衝撃で、健は何もかも思い出した。

松本祐樹に殴られたこと、神陰浩介が祐樹を止めに来たこと、意識を失う前に、一人の青年が走り寄って来たこと。

——そして、夢を見ていた自分に、誰かが何か囁いたことを。全てを思い出した所で、健の頭の中に新たな疑問が生まれた。

——自分に何かを囁いたのは、一体誰だったのか？

健が意識を失った時のことを思い出していると、

「あっ！和島健くん、どうかしたの！？」

と、焦り気味な声で走り寄ってくる女性が一人。

女性はナース服を着ていて、その格好を見ただけで看護師だと分かった。健は、

「あ……いえ……大丈夫です。ちょっと立ち上がるうと思っただけ、ふらついてしまっただけ……」

「無理に立ち上がっちゃ、駄目じゃないのっ！ もう……まだ調子悪いみたいだから、安静にしててね！」

と、看護師に怒られてしまった。看護師に手伝われながら、健はベッドに横たわった。すると看護師が、健に話しかけた。

「健くん、いきなりだけど、私の弟と何かあったの？」

「え……？ 弟って……」

看護師は、健の言葉を遮るように話を続けた。

「神陰浩介、私の弟。私は神陰雫よ。」

それで、あなたを運んできたのは浩介なの」

——え……！？ 神陰浩介が僕を……どうして？

しかも、この看護師さんは神陰くんのお姉さんで……

驚きのあまり、健は頭がグチャグチャになっていた。

「まあ……患者さんにこんなこと聞くのもなんだから、答えなくてもいいわ」

雫はクスツと笑いながら言った。そんな彼女には目もくれず、健は一人で考え込んでいた。

——病院に、僕を運んでくれたのが神陰くんだったなら……

意識を失う時に走り寄ってきたのは、神陰くんだったんだ……

そして、囁いたのも……

健は、眠っている時に囁かれた言葉を思い出していた。

その言葉は——……

俺は、いじめが嫌いだ。暴力はもつと嫌いだ。一番許せないのがいじめを見かけても、見過ごす奴だ。そのいじめを止めれば、今度は

自分がいじめられると思っっているらしい。だが、見過ごす奴はいじめている奴と同罪だ。

止める奴がない限り、いじめはどんどん酷くなっていく。

『友達があの人のことを嫌いだから、私も嫌いになろう』
なんて、言い訳にしか過ぎないのだ。

まあ…そうした奴らがいじめグループに入り、いじめられている人を精神的に追い詰める。そして、最終的にいじめられた人は自殺をしてしまう……。こんな残酷なこと……

俺は許せない！！　こんなことはあつてはならないんだ。

だから、俺はこれまで数々のいじめを止めて来た。

みんなが幸せに暮らせるように……。

だが、止められないいじめはいろんな所にあふれている。

俺の通っている双葉学園でも……。双葉学園ではいじめのリーダーが超大金持ちで、暇つぶしに学校で適当にターゲットを決めてその人を大人数でいじめている。

ちなみにお父さんは、大企業の会社の社長で双葉学園の学校長も頭が上がらないらしい。

いじめのターゲットになってしまった人は、学校全体からいじめを受け、先生達にも見捨てられて不登校になるひが多かったが、今回は違かった。いじめられながらも頑張って諦めないで学校に通っていたんだ。

しかし、残念ながら昨日、彼……“和島健”君は学校に来なかった。

また今回も駄目だったか……。そう思った。けれど、もう俺の目の前で不登校になる人、いじめにあう人を見たくはない。とにかく健君の事が心配で健君の家（知ってる人に聞いて）に向かって夕焼けの中を走り出した。その途中、健君と祐樹がいて、祐樹は健君に暴力をふるっていた。俺はすぐ止めに入り、祐樹と帰るフリをした。祐樹が帰った後、俺は健君のもとへ行き、意識が無かったため、病院に運んで行ったんだ。その時、俺はものすごく後悔した。

「なんでもっと早く来なかったんだ・・・！！」と悔しくて悔しくて、そんな自分が情けなかった・・・健君にも申し訳なくて、気付いたら考えていたことが口に出ていたんだ。

「ごめん…ごめんな。俺がもっと早く来ていれば、こんな事にはならなかった・・・！　いつかこないじめ、止めさせるから、それまで待つてくれ・・・」

そして、俺は決心したんだ。こないじめ終わらす！　絶対に！！

そのためには、あの2人の協力が必要だな。

神陰浩介は、フツと笑ってケータイ電話を取り出し、ある番号に電話をかけた。

「神陰だけど、相談したい事があってさー・・・」

「俺は、決心したんだ」(後書き)

第2章では、神陰浩介の姉の神陰雫が初登場！
皆さんからの感想待ってます。

第3章もよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9646p/>

幸せの歌声

2011年10月8日12時49分発行